

日本組織培養学会

昭和57年7月12日発行

会 員 通 信

第47号

発行責任者

三井洋司・山本清高（老人研）

小山秀機（癌研）

菅 幹雄（東北大・抗研）

井出利憲（広島大・医）

東京都板橋区柴町35-2（〒173）

東京都老人研究所

電話 03-964-1131

§ 会長を引き受けて

山 田 正 篤

日本組織培養学会の規則が改正されて会長職を作ることになり、その初代会長に選ばれたことは光栄に思っております。しかし、現在私は日本細胞生物学会の会長でもありまして、ふたつの学会の会長を引き受けてよいかどうか考えさせてもらいました。

結局、会長をお引き受けしたのはつぎのような理由からです。まず、この二学会のもつ狙いが比較的良好に似ており、また会員に重複が多いので、この際両方をみながら相互の関係を考えても良いのではないかということです。また、1984年には東京で国際細胞生物会議が開かれますが、その会議への協力体制を作るのによいという意味もあります。そんなことで、日本組織培養学会の会長を引き受けることにしました。

と申しましても、つねづね私は学会の会長がバタバタ動かなくても、会員の意向に従って会が円滑に運営されるのが良いと考えております。とくに、本学会は規則改正がおこなわれたばかりであり、しばらくはこの体制を続けてみて、その間に直すべき点を考えて行くのが良いと思います。幸いに新幹事の諸君の多くは幹事経験者であり、これまでの学会のことをよく知っております。従って、私の役目は会員の希望をきくことにあると思いますので、どんなことでも学会に対するご意見をお寄せいただきたいと考えております。

よろしく願いいたします。

§ 第53回総会議事録

第53回総会は、第53回研究会（世話人：中澤恒幸会員）の会期中1982年5月20日に行われた。今回は、新規約のもとで行われた初の選挙の結果、会長が選出されている。

総会の議事、報告、承認事項は以下のとおりである。

1. 選挙結果の報告（別項参照）。
2. 会長挨拶：山田正篤会長より、会長就任の挨拶があった。日本細胞生物学会々長にも就任しているため、両学会の親密化をはかりたいとの主旨であった。会長より新幹事紹介の後、委嘱された役員幹事は、会長代行－黒田、会計－梅田、庶務－大野、編集－三井・菅各幹事である。別に、会計監査に山根 紘、乾 直道会員、編集委員に井出利憲会員が委嘱された。山本清高会員は引続き会員通信編集を担当して戴けるとのことである。

3. 新入会員の紹介：正会員22名，賛助会員3社（別項参照）。
4. 会計報告（別項参照）：会計報告に付随して，特別会計を“勝田基金”と呼称するよう提案があった。特別会計は，故勝田 甫会員が，1977年国際シンポジウム開催後の剰余金をもって創始し，また，昨年，勝田夫人より，多額の寄附があったとの理由による。この呼称に対して，勝田基金をもとに，研究奨励賞を創設してはどうかという積極的賛成論と，他の寄金も特別会計に組み込まれている現状からの慎重論とが述べられ，次回幹事会で検討の上，今後の総会にはかることとなった。また，特別会計より招待講演助成を行う場合には，前もって幹事会の承認を得る旨，報告された。
5. 次回研究会の案内（別項参照）。
6. 各委員会報告：培養器材購入委員会（角屋委員長），教育システム委員会（梅田委員長），用語委員会（黒田委員長）より報告があった（別項参照）。
7. その他：本学会は年2回研究会開催が恒例となっているが，それを会期を延長して年1回とする案が幹事会にて討議されている旨，庶務幹事より報告があった（別項参照）。

（大野忠夫）

§ 日本組織培養学会第54回研究会のご案内

昭和57年度秋の本学会第54回研究会は，静岡県の修善寺で開催いたします。会場の修善寺町総合会館は，昭和55年12月に完成した新しい会館です。伊豆の自然と歴史と文学に囲まれながらの研究会に多数の皆様のご参加を期待申し上げます。

1. と き：昭和57年10月27日（水），28日（木）

2. と ころ：修善寺町総合会館

静岡県田方郡修善寺町修善寺 838-1 〒410-24

TEL 0558-72-6530

3. 特別講演：Dr. Leonard M. Franks

（Imperial Cancer Research Fund, London）

“Neoplastic transformation in differentiated epithelial cell systems *in vitro*”

4. シンポジウム：

“組織培養研究の新しい展開”

オーガナイザー 黒田行昭

ハイブリドーマを使用したモノクローナル抗体の産生やインターフェロン産生，植物の細胞雑種など，細胞工学や遺伝子工学と結びついた組織培養研究の新しい局面について数名の方の講演を予定しております。白熱した討議を期待しています。

5. 参加および講演申し込み：

参加および一般講演希望者は，申し込み票にご記入の上，下記の世話人あてお送りください。一般講演は1題18分，討論7分を予定しております。

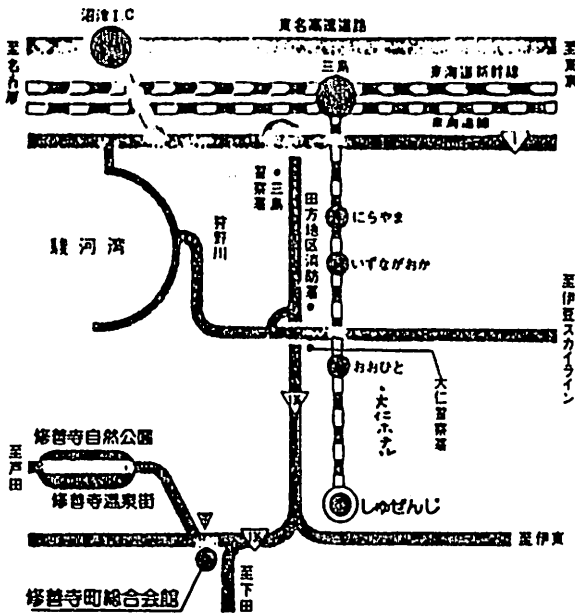
講演申し込み締切：昭和57年8月10日（火）

6. 参加費： 会員 4,000 円，非会員 4,500 円
7. 懇親会： 昭和57年10月27日(水)午後6時より修善寺総合会館内大研修室で行ないます。
懇親会費 3,000 円
8. 参加費および懇親会費は，郵便振替(東京7-84915)，または銀行振込(三和銀行 三島支店 普通口座 135701 日本組織培養学会第54回研究会 黒田行昭)にてお送りください。
9. 宿泊：

会場の修善寺町総合会館は，国鉄三島駅から電車で30分，古くから知られた「いで湯の里」修善寺温泉にあり(図参照)，準備委員会ではご参加の皆様のために会場の近くの旅館をお世話いたします。はさみ込みの「宿泊のご案内」をご覧の上，「宿泊申込書」により修善寺温泉のだや去留庵・学会準備委員会・野田和敬氏あてにお申し込みください。

修善寺町総合会館の略図

静岡県田方郡修善寺町修善寺838-1 〒410-24
☎ 0558-72-6530



なお，洋風ホテルをご希望の場合は，大仁ホテル(TEL 0558-76-1771；会場まで約5 km，タクシーで約10分)，または三島市内のビジネスホテルなどをご利用ください。

10. 参加，講演申し込み，および連絡先：

〒411 静岡県三島市谷田 1,111

国立遺伝学研究所形質遺伝部

日本組織培養学会第54回研究会

世話人 黒田行昭

TEL 0559-75-0771(内線 262)

〔注〕

- 1) なお、10月29日(金)、30日(土)の両日、同じ会場で、日本環境変異原学会第11回大会が開かれます。日本組織培養学会第54回研究会参加者は、日本環境変異原学会大会の特別講演およびシンポジウム(10月29日の予定)に限り、ご自由に出席できます。
- 2) 講演申し込みをされた方には、「組織培養研究」掲載の為の講演要旨(オフセット印刷)の用紙をお送りしますので、8月31日(火)までに世話人あてにご返送下さい。

§ 会長、幹事選挙の結果について

昭和57年～60年度会長、57・58年度幹事選挙は3月23日メ切られ、放医研にて賛助会員(池田理化)の立合いのもと、開票の結果、下記のように決定しました。

会長	当選	山田正篤	33票
	次点	佐藤二郎	12票

幹事(40才以上)

当選	黒木登志夫	37票
〃	梅田誠	24票
〃	難波正義	20票
〃	黒田行昭	19票
次点	松村外志張	18票

幹事(40才未満)

当選	大野忠夫	34票
〃	野瀬清	28票
〃	三井洋司	28票
〃	常盤孝義	20票
次点	菅幹雄	18票

(常盤会員は留学のため辞退されましたので菅会員が繰上げ当選となりました)

なお、投票内容は、投票者総数84名に対し、

会長投票総数	84票
有効投票数	81
無効投票数	1
白票数	2
幹事投票総数(8名連記)	672票
有効投票数	621
無効投票数	1
白票数	50

でした。投票用封筒には記名していただきましたが、投票用紙は無記名で、開票前にプールされ、結

果的に記名投票にならないようにしました。新会長・幹事は4月1日就任となります。

(会長・幹事選挙管理委員会
大野忠夫、色田幹雄)

§ 日本培養学会昭和56年度会計報告

収 入		支 出	
正 会 員 費	1,245,000 円	会 誌 発 行 費	1,030,230 円
賛 助 会 員 費	830,000	ビブリオグラフィー'79 ^{*1}	
入 会 金	39,000	(会 員 通 信 広 44, 45, 46)	
文 部 省 刊 行 補 助 金	0	会 誌 発 送 費	456,350 ^{*2}
雑 収 入	32,400	通 信 費	94,050
		印 刷 費	551,480
		業 務 委 託 費	556,014
		研 究 会 補 助 金	100,000
		雑 費	54,670
小 計	2,146,400	小 計	2,842,794
前 年 度 よ り の 繰 越 金	742,154	次 年 度 へ の 繰 越 金	45,760
合 計	2,888,554	合 計	2,888,554

*1 ビブリオグラフィー'79 834,800円を含む

*2 " 送料 102,000円を含む

昭和56年度収入とは別に 前受会費(57年度会費)収入 526,600円があり、
57年3月31日現在日本学会事務センター預り金は572,360円です。

特別会計

収 入		支 出	
51 回 研 究 会 よ り	200,000 円	第 3 回 国 際 細 胞 生 物 シ ン ポ	100,000 円
故 勝 田 先 生 よ り	500,000	へ の 分 担 金	
利 子 収 入	13,947	Dr Stiles 招 待 援 助 金	200,000
小 計	713,947	Dr T'so 招 待 援 助 金	200,000
前 年 度 繰 越 金	753,171	小 計	500,000
合 計	1,467,118	次 年 度 繰 越 金	967,118
		合 計	1,467,118

日本組織培養学会昭和57年度予算

収 入		支 出	
正 会 員 費	1,300,000 円	会 員 通 信 発 行 費	210,000 円
賛 助 会 員 費	830,000	“ 発 送 費	150,000
入 会 金	30,000	通 信 費	100,000
雑 収 入	30,000	印 刷 費	100,000
		業 務 委 託 費	700,000
		研 究 会 補 助 金	600,000
		雑 費	60,000
小 計	2,190,000	小 計	1,920,000
前年度よりの繰越金	45,760	次年度への繰越金	315,760
合 計	2,235,760	合 計	2,235,760

支出の項目で79年度発行のビブリオグラフィーの費用、その発送費が加わっていること、隔年に印刷する名簿印刷が印刷費の大きな割合を占めたことなどで次年度への繰越は~~多~~45,760と少額になった。

以上の56年度の会計を踏まえて57年度予算をたててみた。業務委託費が学会事務センターからの依頼でやや割高に見積ってある。一応この線で健全財政は保てる予定である。

(梅 田 誠)

§ 培養器材一括予約購入委員会からの報告

本年3月で私の幹事任期が切れましたが、5月19日の幹事会に於いて引続き担当させていただくことになりました。会員の皆様がより安く購入できるように今後とも努力していききたいと思います。

1. 第2回申込み結果

申込み者：52名

申込書数：100（プラスチック製品82，血清18）

プラスチック製品はCorning 13 (15)，栄研器材 1，Costar 2，Lux 9 (15)，住友ベークライト 7 (9)，Nunc 12 (13)，テルモ 2，Falcon 36 (34)；ケース総数 647 (567) でした（括弧内は前回）。血清はGIBCO 10，Flow 5，Irvine 1，Armour 2；総量 69.5ℓ でした。

2. 第3回実施について

申込書発送は8月5日，締切日は9月10日を予定し，契約期間は11月から翌年4月までの半年間とします。

申込方法は従来通りです。

(角 屋 堯 英)

§ 組織培養用語委員会からの報告

かねて本委員会で編集中の「組織培養辞典」は、日本植物組織培養学会の協力を得て、収録する約1,800項目の用語の解説を、約130名の会員および非会員の方々に執筆を依頼し、その原稿がほぼ集まりました。これを編集担当者による査読を行い、これも大体終了しました。このあと多少若干の用語について動物関係と植物関係の記述の調整を行い、8月には印刷に取りかかります。昭和58年2月頃には出版のはこびとなります。

(黒田行昭)

§ 第3回国際細胞生物学会 (ICCB) に向って…… (5)

第3回 ICCB の実行委員会が、5月後半に京都で開かれた。プログラムの大綱は6月末に決めることとし、ワークショップとシンポジウムは約40件行い、一般演題は、ポスターを主とする。また、58年3月迄にプログラムの枠組みをつくること等が予定されている。

培養学会会員が希望するシンポジウム等のテーマ名は、46号通信に載せた通りであるが、今回、希望を寄せていただく最後の機会となりますので、大至急ご意見下さい。

連絡先： 三井洋司 (老人研)

TEL 03-964-1131, 内線 3080

§ 提案「組織培養学会研究会を年1回に」

癌研・小山秀機, 放医研・大野忠夫

培養学会研究会は5月の名古屋の研究会で第53回を迎えた。研究会は年2回開催されるから、すでに26年の年月がたったことになる。その間、本学会の発展はめざましく、今や500名の会員を有する中堅学会となっている。そして組織培養があらゆる生物科学、生命科学の必須の技術となり、我国でこれほど普及したことは、これまで苦勞してきた会員諸氏の努力の賜物であろう。

このような情勢の変化にともない、組織培養学会は組織として多くの問題点をはらむことになったのは御存知のとおりである。そこで昨年新しい規約の整備、ビブリオグラフィーの廃止、会誌の発行などの改革を行ってきた。しかし、学会にとってもう一つの重要な問題がある。それは今迄研究会が年2回開催されてきたが、これが現在でも必要かどうかという問題である。そこで私達は、「研究会を年1回、春に開催しよう」と提案したい。以下この提案を行う理由を述べよう。

1. 組織培養技術は十分に成熟した。したがって、この技術を日本になるべく早く広めようという使命感は不必要な時代に入った。

学会発足当時は組織培養を始めた同好の士は極めて少なく、技術は未熟(失礼!)でなるべく頻繁に集まって情報の交換をする必要があったらう。また学会の存在を他の人々に印象づける必要もあ

ったかも知れない。しかし、今や組織培養技術は十分成熟して日常的技術となり、情報に事欠くことはなく、また本学会の存在は十分認められている。

2. 年1回でも発表の機会が減ることはない。

会員のほとんど全ての方は本学会以外の学会、たとえば、癌学会、細胞生物学会、生化学会、発生生物学会、変異原学会、ウイルス学会、老年学会などに所属されていると考える。これら学会の多くは秋に年1回の学会をひらいており、秋の組織培養学会研究会はなくても、発表の機会は減少するものではない。むしろ、他学会で発表して、別分野の人々の批判を受ける方がよいくらいである。また組織培養学会の特色であるまとまった発表内容と十分な討論時間が、年1回の研究会では失われるという議論もあるかもしれない。しかし1回の会期を3日間とする、2会場とする、示説をふやす等々の工夫をする余地はまだ多い。

3. 学会への出張期間、出張費を節減し、実際的な研究にかける時間を多くできる。

現在、学会の多様さには目をみはるものがある。もちろん、どの学会に出席するかは個人の自由であるが、種々の付き合い(しがらみ)から関連学会に出席せざるをえない諸先生も多いと聞く。出席せねばならぬ学会を一つでも減らすことは、研究時間を増し、最近急激に増えた出張費を節約するのに大きな効果がある。

4. 学会および研究会の運営の労力、経費を節減できる

一回の研究会開催は、学会活動に責任のある会長、幹事、各委員会委員、および研究会の世話人に多くの時間と経費のやりくりを強いることになる。学会責任者は普段の学会のお世話のみならず、学会にはまず出席せねばならない。特に研究会の世話人は開催にあたってすべてのおぜん立てをし、また、その経費を工面する必要がある。まさに研究会は、これらの方々の献身的努力によって成り立っているものである。研究会を年1回にすることによって、学会責任者の負担を半減することが出来る。

このような提案に賛成意見も、反対意見もあると思います。また、研究会としておこなうか、学会とするかという問題もあると思います。賛成、反対意見その他なんでも結構です。私達に直接でも、また会員通信にご意見をお寄せください。

§ 第53回研究会を終えて

名古屋保健衛生大・医 中 沢 恒 幸

57年5月20、21日と名古屋で無事研究会を終了し会員の皆様の御協力に感謝しております。出席者150名で2:3の割で非会員、とくに地元の人々が多く、このことは本学会が地域の啓蒙に役立ったことを意味します。これからも意識的に、時折地方都市で開催されては如何でしょう。

内容は4年ぶりで神経のシンポジウムを組み、また名大五島氏のお世話で本会初の筋細胞シンポジウムを組みました。これらの領域の進歩はめざましく、毎年神経科学協会年次集会には30題ぐらいの培養関係の演題が集ります。なかにはどうかと思われるものもあるものの兎に角多いのです。これは今に始ったことではなく以前M. Murrayが世界のBibliographyをNIHの予算で作ったとき、本会も協力して国内のものを集めました、驚くほど多数の神経系の仕事がありMurrayさんが大変よろこんでいたのを思い出します。

本会に神経の人々も出席するよう山田さんより話がありました。私など稀にしか出席しない古狸でなんとも思いませんが、若い人達には“オソロシイ会”という印象があったようです。これは有名な故人の責任もありましたが、故人はロビーにいるか、飲んでいるかで実際に神経屋の話を会場で聴くこともなく、従ってオソロシイというのは雰囲気だったのでしょう。よいことですネ。オソロシイというのは敵しさに通じますから。

神経屋というのは最終的に機能を追うことになるのでスマートを好む仲々和さないスタイリストが多いのですが、もっともっと泥にまみれて美味しそうな仕事をのみ拾う傾向に反省しなければ と思っています。

次回(54回)黒田さんの会が盛りあがりのある活発な討論集会になることを念じ、一周忌を経た故人勝田さんを偲びながら会員の皆さんへのお礼とします。

§ 北から南から — 研究室だより —

☆ 東北歯科大学組織培養共同研究施設

昭和47年、福島県郡山に東北歯科大学が新設されたが、大学改革運動の余波を受けて旧来の如き講座制度に縛られない共同利用の研究施設が要望された。その結果、間もなく電頭、RI、分析、電算機、等々の独立施設に並べて組織培養の施設も置かれることとなった。略して培養共研と称しているが、ここには準備室、培養室、前室、観察室が設けられ、延面積は60m²余となっている。各室間にバスボックスを始めとして、この一画に専用のエアコンを設備し、真夏にも快適な培養が行えるよう配慮されている。内部には2台のクリーンベンチのほか、FORMAや池本のインキュベーター、特殊培養のための設備が備えられ、16mm映画の撮影もできる。この施設の運営は利用者の代表及び第三者と管理責任者(施設長)よりなる運営委員会によることになっているが、日常的には利用者間の話し合いと、施設長の裁量にまかされる。また、施設の運営上必要な設備の更新や備品類の補充は毎年度中央予算により賄われるが、研究に必要な血清、培養液、培養皿等の消耗品は研究者の所属する講座費での負担となる。さて、この施設が実質的に活動し始めてから未だ日も浅く、この間の業績も数える程しかないが、紹介を兼ねて列挙すれば次の如くである。

1. 赤血球系幹細胞のコロニー形成と脾抽出物の効果に関する研究
2. 白血球系及び赤血球系コロニー形成に及ぼす笑気ガスの影響
3. 舌乳頭の器官培養による神経要素の味蕾分化に及ぼす効果
4. polycythemia vera 患者の末梢血中幹細胞のコロニー形成能に関する研究
5. 舌による臓器灌流培養法の研究
6. 健康人における末梢血中の赤血球系幹細胞(BFU-E)の出現頻度に関する研究
7. 胎児血に含まれるBFU-E及びコロニー形成促進因子(BPA)に関する研究
などであり、現在研究中のものとしては、
8. 小児白血病患者のBFU-EコロニーにおけるHb-Fのグロビン鎖組成に関する研究
9. 骨髄由来のpreadipocytes(MC3T3-G2株)の造血微細環境の形成に関する研究

10. myoblasts (MC3T3-A1株)の培養条件下における分化とそれに伴う電気生理学的研究

11. osteoblasts (MC3T3-E1株)の in vitroでの石灰化に関する研究

12. 口腔粘膜上皮(家兎)の培養とその外科的応用に関する基礎的研究

などである。現在、近くの福島医科大学からの共同研究者をも含めて8名の研究者がこの施設を利用しているが、その殆んどは若い人達であり今後の発展が期待される。

(葛西四朗)

☆ 大分医科大学内科学講座第一

大分医科大学は一県一医大の構想の下に昭和51年開学された、いわゆる新設医大である。その内科学講座第一の主任として、昭和53年に九大第一内科より高木良三郎教授が着任されたが、当時は大分駅より17.8kmはなれた丘陵を切り拓いて、建設途上であり、あたりは竹林や雑木林の名残をとどめ、夏もうぐいすが鳴くのどかさであった。現在は市街地からの医大道路が完成し、東九州から大分、湯布院をぬけて福岡方面に向う幹線道路となり、医大周辺もめざましく発展しつつあるが、春夏秋冬、刻々と変化する鶴見岳や由布岳の眺めは変わらない。私達の研究室は、研究棟最上階の8階にあるが、窓からこれら山々がながめられる様に、ガラス張りの二重窓となっている。約13坪のごじんまりした無菌室で、クリーンベンチ3台、クリーンルーム2室に孵卵室1室、炭酸ガス培養器が2台設備されている。54年研究棟完工時は、高木教授と穴井聡子技官の2名であり、教授が母教室に帰られ不在の時など、研究室では穴井技官がひとりぼっちでネズミのお相手をするといった状態であった。その後、徐々に定員も増し、57年4月現在、医局員は医員、技官を含めて12名となった、このうち伊東助教授以下5名は循環器内科学の専門で、高木教授のほか6名(小野、平岡、横川、国広、佐藤、穴井)が組織培養を用いた代謝内分分泌の研究を行なっている。主なテーマは、1) 膵島ホルモン産生細胞の培養及び細胞株の樹立、2) ホルモン産生能発現機構の解析、3) 腫瘍化に伴うホルモン産生能の変化—インスリンノームを中心として、4) ヒト肝実質細胞培養系の確立などであるが、スタッフが増加すれば培養を応用したホルモンリセプターの研究や老化の研究にも拡げて行きたい意向がうかがわれている。56年10月に附属病院が開院し、医局員全員が外来と入院患者に振りまわされている。2年後には、はじめての卒業生を送り出す予定であり、教官側としてはそろそろ医師国家試験の合格率が気になる頃であるが、糖尿病、甲状腺疾患、肝疾患、高脂血症など興味ある症例にもめぐまれており、培養系を活用したヒト疾患の研究が発展することを夢みている。

(小野順子)

☆ 九州大学生体防御医学研究所ウイルス学部門

今年4月から今までの医学部癌研究施設と温泉治療学研究所とが合併し、生体防御医学研究所が発足した。ウイルス学部門は旧癌研究施設病理部門をそのまま引継いだもので、木村元喜教授以下、教育研究スタッフ3名、技官2名、基礎系医員2名、大学院生1名を含む総勢9名から成る。ウイルス学および細胞生物学的手法を用いて、小型DNA型ウイルス(SV40、ポリオーマウイルス、アデノウ

ウイルス12型)の発癌遺伝子の機能および培養動物細胞の増殖制御機構を明らかにすることが主テーマで、これらの二つを互に結びつけながら発癌機構およびウイルス増殖機構を明らかにして行きたい。現在具体的には次のような研究を行っている。(1)ウイルスの吸着から増殖までの全過程の解明。(2)細胞トランスフォーメーションの諸過程におけるウイルス遺伝子の働き。(3)ウイルス遺伝子の発現の制御を行う細胞側因子。(4)非トランスフォーム細胞の増殖制御機構の解析。(5)細胞増殖制御機構に及ぼすウイルス遺伝子の作用。(6)細胞周期特にG₀, G₁期での温度感受性変異株の解析。

我々の研究室では上記の各々のウイルスの増殖のための細胞系、およびそれらに共通のトランスフォーメーションアッセイの細胞系を備えている。また、各々のウイルスについて増殖およびトランスフォーメーションが温度感受性である変異株を多数揃えている。さらにトランスフォーメーションアッセイに使用する3Y1細胞の増殖に関する温度感受性変異株を多数分離している。こうした非常に長い年月をかけて分離した莫大な数の細胞株、ウイルス株を実験材料にするため、これらの保存管理には厳重な注意を払っている。超低温槽の非常時に備え、自動発電機、改造したCO₂補助冷却装置(非改造の市販品はCO₂噴射口が凍結して肝心な時に動作しないことがある)、非常通報電話装置、休日の見回り等、三重にも四重にも安全を期している。

(奥田篤行)

§ 編集後記：

忙しくて、フーフー言いながら、やっています。原稿を全部受理してから、会員通信が皆様の手元に届く迄、どんなに急いでも3週間はかかります。次回は12月発行予定ですので、それを見越して、原稿を宜しくお願いします。

新しい会則と役員のもとで、中味のワインも新しい香を発酵できるか、今後の楽しみです。

編集幹事が、会員通信と「組織培養研究」の両方にたずさわることにより、学会が「組織培養研究」に対して責任をもっと果たそうということになったのですが、行うは難し……の感もあります。

次号は、図やカットを入れて読み易くしようと考えていますが、それも、行うは難しいか？

(Y. M. & K. Y.)